

輪島調査報告

輪島調査報告

水野 勲

今年度は、石川県輪島市に学部地理学コース3年生14名と、大学院生4名、教員2名(水野・田宮)で巡検を行い、そのうち修士1年の参加者1名に巡検報告を行ってもらったのが、以下の文章である。このフィールドワークは、大学院の開講科目「地理環境学講義実習」(2単位)として実施し、前期期間中は、学部の「地理学フィールドワーク演習」にも参加して、学部生との共同調査の準備を行う。4～6月にフィールドワークの準備を室内で行い、7月7日～11日に現地調査し、9月末までに報告書の第一次稿、10月には、その原稿に基づいた発表と討論、そして11月末までに報告書の最終原稿を提出してもらった。

このフィールドワークを水野が企画したのは、2006年12月であり、この後の2007年3月25日に能登半島沖地震(輪島は震度6強)に見舞われた。予想外の地震に驚くと同時に、4月からのフィールドワーク演習では、調査地域を輪島から他に急遽、変更することも考えた。しかし、輪島市役所、商工会議所、宿泊ホテルなどに輪島の現状を尋ねたところ、問題はない、調査に予定通り来てほしいという答えが一様に返ってきた。7月上旬に輪島を訪れたとき、地震直後の家の倒壊や道路の陥没、土砂崩れ、神社の鳥居の破損などは、修復されて地震の影響がないかのように一瞬見えた。しかし、輪島塗の工房、朝市の店舗、酒蔵など、表通りからは見えにくい場所で、地震の長期的な影響が残っていた。

輪島市は、能登半島の先端にあり、2年前に第3セクター「のと鉄道」輪島～穴水間が廃止されてから、金沢からの特急バスと、能

登空港(東京との間を一日2往復のみ)が、現地にアクセスする交通手段である。過疎化、高齢化が進み、バブル崩壊以降の輪島塗の需要低迷もあり、この地震の影響は大きなものがあった。しかし、東京商工会議所の協力により東京で「元気です!能登輪島物産展」を開いたり、「がんばろう神戸」から連想した「がんばる輪島!」の垂れ幕が、輪島市役所に掲げられていて、全体として輪島の人々は、地震の影響を明るく乗り越えようとしていた。ちなみに、その後に発生した中越沖地震では、柏崎市が「もっと、がんばる柏崎!」というキャッチフレーズを採用していた。

このフィールドワークは、小グループごとに、輪島塗、千枚田、朝市、能登空港、ブログ発信する地元の人について行われ、調査結果の詳細は、輪島巡検報告書を参照していただきたい。その中では、能登半島沖地震後の輪島について、残念ながら、掘り下げた調査結果になったとはいえない。それは、調査期間中も、輪島市やいくつかの大学の調査チームが地震被害を調べ、災害復旧につとめている真っ最中だったからである(私たちの一部の院生・学生も、壊れた土蔵の復旧ボランティアに加わった)。もっとも、地震後に減った観光客の地元経済への影響を心配していたためか、私たちの調査に加わった学生・院生の訪問を、輪島の人々はどこでも歓迎してくださった。災害復興中にもかかわらず、私たちの地域調査に協力してくださった輪島市のすべてのの方々に感謝する。

みずの・いさお

お茶の水女子大学大学院